

100歳の約束

——昨日は素晴らしい演奏でした。もっと長く聴いていたかったです。

「自分としても誇れる演奏になったと思います。作曲家は往々にして、オーケストラに自分の作品を『いい曲なのだから、もっと美しく弾いて!』とは言えないものですからね。それに作曲家自身も自分の曲に何が内包されているのか、よく解っていないことが多いのです。

この曲を最初にバーンスタインと弾くことになった経緯はよく覚えています。彼と共演し始めて6、7年目のある日、自分が作った交響曲を知っているかと聞かれたので、『知っています。「第2番」は弾きました』と言うと、彼は椅子から落ちそうになり、『なんで今まで言わなかったのか』と言うのです。聞かれなかったから言わなかっただけなのですが(笑)。「それじゃあ、絶対共演しなきゃ!』と言ってすぐ、1年後だったか、1986年に女王も臨席されたロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホールで演奏したのです。その映像がYouTubeにも暫く出ていたけれども、ドイツ・グラモフォンからDVDが発売されたので削除されてしまいました……。その後の3年間で10回ほど共演しましたが、毎回違う演奏なのです。それほど、その時の心に正直な音楽なのです。例えば、ある日、バーンスタインが落ち込んでみえたのですが、それはケネディの命日で、暗殺時の話やベトナム戦争反対の立場を話してくれたりもしました。そうして彼は魂の底から演奏したのです。それはもう完璧

クリスティアン・ツィメルマン、 バーンスタインについて語る

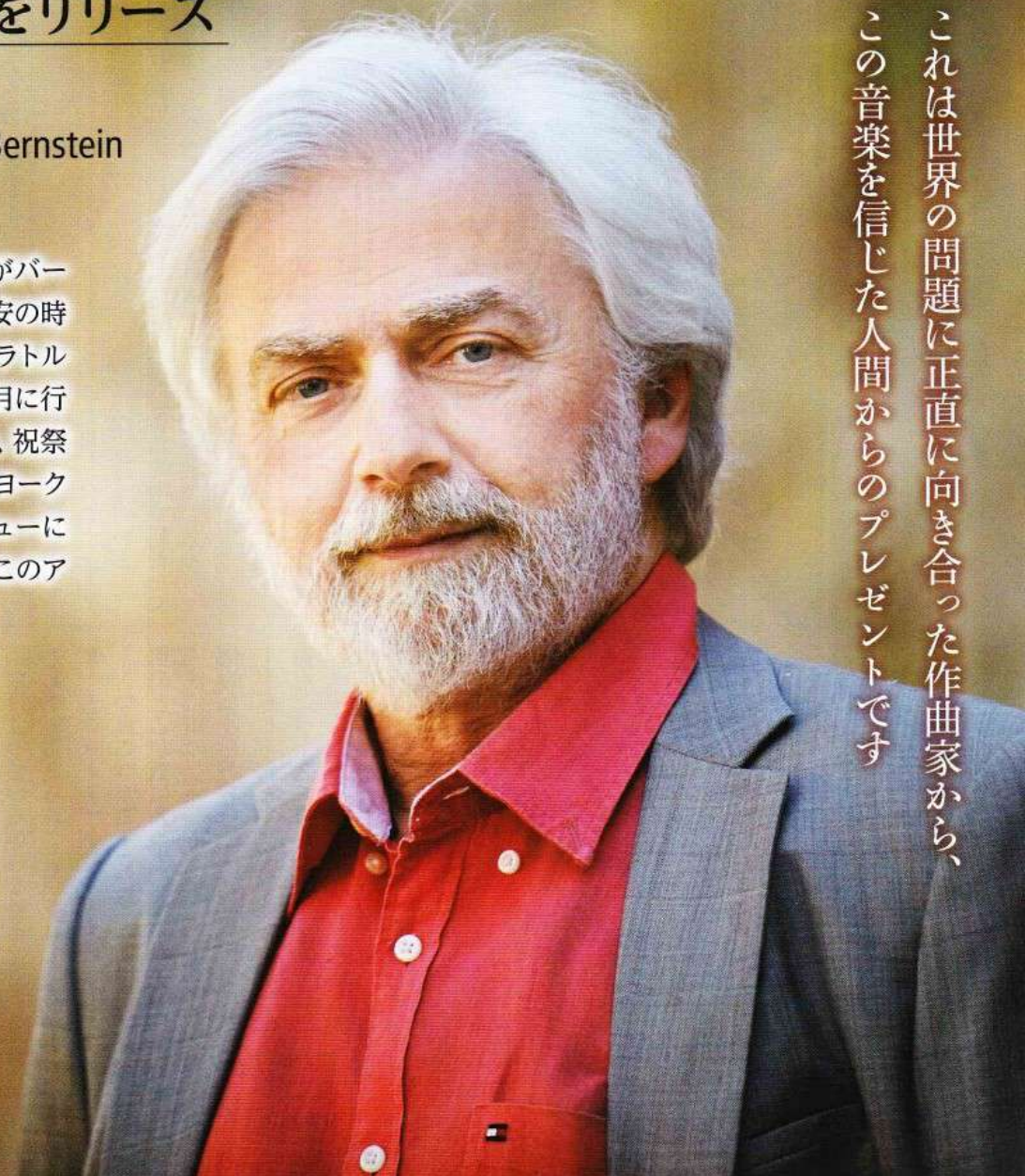
取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

ニューアルバムをリリース

Krystian Zimerman
speaks about Leonard Bernstein

クリスティアン・ツィメルマンがバーンスタイン「交響曲第2番《不安の時代》」をリリースした。サイモン・ラトル率いるロンドン交響楽団と、8月に行われたザルツブルク音楽祭で、祝祭大劇場に登場した翌朝、ニューヨーク行きを中止してまでインタビューに応じてくれたツィメルマンに、このアルバムのことを中心に聞いた。

これは世界の問題に正直に向き合った作曲家から、この音楽を信じた人間からのプレゼントです



に素晴らしかった。私にとって、この曲以上に魂と音楽の融和が達成されているものはありません」

——バーンスタインは「僕が100歳になった時にもう一度共演して欲しい」と頼んだということですが、昨日は共演の実感がありましたか。

「サイモンは『彼がここにいた気がする』と、昨日も含めて、ツアー中に何度も言っています。バーンスタインはこの曲の中に信じられないほど存在し続けているのです。私はツアー中に何度も涙がこみ上げてきましたが、ラトルは音楽にのめり込んでいました。彼は全身全霊をかけていたので、そのまま死んでしまうのではないかと心配になるほど、すべてを捧げていました。私がいつも生徒に繰り返し聞かせるように「私たちが音楽の最初の犠牲者にならないでください」のです。その信念がいちばん大切で、それがない人は職選びを間違えたとさえ言えます」

バーンスタインからの学び

——バーンスタインとの出会いはいどのようでしたか。

「1976〜77年にウィーンでマーラーのリハーサルを聴いていた時、若い才能を探していたバーンスタインにピアノを弾くよう言われたのです。彼はとても気に入ってくれて、すぐにストラヴィンスキー《結婚》をマルタ・アルゲリッチ、シプリアン・カツァリス、オメロ・フランセシユラと4台のピアノで弾かせてもらいました。それから私たち4人は生涯の友となりました」

——バーンスタインとの最後の共演はいつですか。

「ペートーヴェンの5つのピアノ協奏曲をウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と録音している最中に亡くなったので、私が『バーンスタイン最後のソリスト』となったのです。『第1番』『第2番』の録音がまだ残っている状態で、急には別の指揮者も空いていませんでした。普通は絶対しないでしょうが、ペートーヴェン自身も、この2曲を弾き振りした記録があるので、バーンスタインの意図を理解していたウィーン・フィルと録音を完成させました。それはとても素晴らしい時間でした。この日以来、彼らと共演していないのを寂しく思います。」

——バーンスタインからは何を学びましたか。

「表現の自由な可能性と、スタイルやテンポ、詞や音符を変えなくても、五線の間には幾通りもの解釈ができるということです。そして多くの力と勇気を与えてくれました。楽観視せず、世の中が間違えた方向に行きそうになったら声をあげることが学びました」

——あの有名な「日本への警告メッセージ」は、バーンスタイン譲りなのですね。

「私のこの姿勢は、家族が払った大きな犠牲からも影響を受けています。そして特に、多くの友情を育み、その国の文化に多大な尊敬を抱いている大切な国に対して、警告を発するのです」

日本から多くを学ぶ

——ちょうど初来日から40年目ですね。

「あ、まさに同じ9月ですね。忘れもしない虎ノ門ホールでした。あれは凄いいシヨックで、4、5年は日本に戻れませんでした。その後はほぼ毎年訪日しているので、こんなに間が空いたのはこの時だけです」

——何がそんなにシヨックだったのですか。

「日本人の、大変まじめに音楽を受け止める姿勢は、世界のお手本となるべきです。他国より良く機能している日本の社会や伝統に深い敬意を抱きました。この国で何かを成すには、もっと準備が必要だと思ったのです。私は日本から本当に

多くのことを学びましたので、その感謝の気持ちを表す言葉が見つからないほどです。日本のピアノリストもレヴェル・アップし、ウィーンのパニストよりモーターが上手なほどです。これからの何か、次のショパン・コンクールのことでも、私で助けられることがあったらどんな形でも仰ってください。日本人の美德でもある謙虚でシャイなところが、音楽の邪魔をしている部分があるかもしれない、などと考えを巡らせています」

——今回『不安の時代』のCDが発売されますが、どのようなメッセージを送りたいですか。

「これは世界の問題に正直に向き合った作曲家から、そしてこの音楽を信じた人間からの聴衆へのプレゼントです。私の聴衆は私にとって、いちばんの成功の証です。そして、バーンスタインに出会わなければ得られなかったかもしれない芸術家としての勇気への感謝の印です」

ルツェルン音楽祭で政治的メッセージを投げかける

1979年にルツェルン音楽祭に初登場したクリスティアン・ツィメルマンが、1992年以来、26年ぶりにルツェルン音楽祭に戻ってきた。サイモン・ラトル率いるロンドン交響楽団とは夏からツアーに出ており、この公演後には訪日したので、直に体験した方も少なくないだろう。

ツィメルマン氏とのインタビューでも「生きた音楽」について言及していたが、ザルツブルク祝祭大劇場で聴いた時よりも濃密な演奏で、「知り得た音楽の中で一番美しい音楽」とバーンスタイン自身が語ったクラリネットのテーマから聴衆の心を揺さぶった。

ザルツブルク音楽祭では始終オーケストラの方を向き、音楽と一体になって上で透明な音を聴かせたツィメルマンだが、今回は内面を雄弁にものがたり、共感の涙を誘った。それもそのはず、この日の彼はピアノを通して大切なことを言いたかったのだ。拍手の後、バーンスタインが「100歳になったらまた共演したい」と言ったエピソードを導入部として、「もし彼が今、この世界に生きていたら何と言ったのだろうか」とつなぎ、永世中立国スイスが、非人道的な争いを続けている国にも武器を輸出しようとしていたことに対する民主主義的解決を切望した。

日本でも政治的メッセージを投げかけたことがあるが、アメリカでは家を焼かれ、築き上げたすべてを失ったという。それでも吐露せざるにいられないツィメルマンの心の叫びは、アンコールに弾かれたシマノフスキ「前奏曲第1番」で如実に語られ、胸を突いた。

■CD

バーンスタイン「交響曲第2番《不安の時代》」[SHM-CD]
〈演奏〉サイモン・ラトル(指揮)、クリスティアン・ツィメルマン(p)、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団[UM-UCCG1810]

■公演情報

2019クリスティアン・ツィメルマン 日本公演スケジュール
(日時・会場・問合せ)▽2月16日17時・柏崎市文化会館アルフォーレ・同0257-21-0010/▽2月23日17時・長野市民芸術館・オフィス・マユ 026-226-1001/▽2月28日19時・サントリーホール・ジャパン・アーツびあ03-5774-3040/▽3月2日17時・兵庫県立芸術文化センター-KOBELCO大ホール・芸術文化センターチケットオフィス0798-68-0255/▽3月9日17時・福岡シンフォニーホール・アクロス福岡チケットセンター092-725-9112/▽3月14日19時・熊本県立劇場コンサートホール・同096-363-2233/▽3月16日17時・横浜みなとみらいホール・神奈川芸術協会045-453-5080